

パネルディスカッション

「こども・若者の主体性を尊重することについて」

○喜多氏

できるだけ彼らが満足して帰れるように、話が進んでいければと思います。

千葉県としてもこども基本法成立以降の新しいこども・若者みらいプランの取組として、こどもの権利シンポジウムが、その出発点という形になっています。今後、こどもや若者が本当に安心して自由に意見が言えるような環境をつくっていく、そのためには何が必要なのかということ若い人たちと共に語り合っていければと思います。

最初は、こどもたちが意見の言いにくい環境で大人の意識がそういうこどもを支えるという立場にないという問題を少し象徴的にまずAさんに学校体験などを中心に話をしていただきながら、どうやったらこどもたちが安心して意見が言えるのか、その在り方、環境みたいなものをみんなで話し合っていきたいと思います。

○Aさん

10年前、県外の高校に在学していた際、先生は東京大学や京都大学への進学実績に強くこだわっていました。そのため、自分の希望とは異なる大学を受験するよう勧められ、進路の話をする前に否定的な指導を受けていました。自分は周囲の期待に応えようと本心を隠し、毎日15、16時間勉強し、部活動も諦めて東京大学進学を目指しました。しかし受験は失敗し、家庭の事情で浪人もできず、望まない大学に進学せざるを得なかった状況です。先生からは結果や努力へのねぎらいもなく、自己責任として片付けられ、大人に裏切られたという葛藤を抱えました。現在、大学院で研究をする中で、当時自分の意見をきちんと聞いてくれる大人がいれば状況は違ったのではないかと考えています。その経験から、地域の大人とこども・若者が関わり、こども・若者が主体的に選択できる環境づくりを目指してまちづくりや研究に取り組んでいます。

○喜多氏

ありがとうございました。今のように、自分の意思が通らない、あるいは自分で決めることが難しい状況をくぐり抜けながら、どうやったら自分の意見や意思が通るのかをずっと模索してきた人たちばかりですので、自分の経験を踏まえて、あの方々にもお願いしたいと思います。



○Bさん

中学校では、いじめや周囲と違うことを否定する空気、目立つ人をたたく雰囲気があり、強い違和感を覚えました。意見を表明して否定される経験をする、次に意見を言うことが怖くなり、現状と違うことを言っても無駄だと感じてふさぎ込む原因になると考えます。学校の立場から、過ごしやすくなるための支援として、まず否定されずに意見や気持ちを表明できる場が必要です。例えば、校則撤廃についてこどもと大人が半々で意見を出し合い、決定まで関わられる仕組みがあれば良いと思います。現状では、意見を言っても最終的な決定は大人が行うため、こどもも決定の場に参加できるようにすべきです。自己決定や自分たちの決定の場をつくることが重要であると考えます。

次に、家庭関係や人間関係で孤立するこどもへの支援が必要です。悩みをそのまま吐き出せる場所が求められます。現在カウンセラーの制度はありますが、医師の介入も必要であり、健康診断と同様に精神面の診断や検査を年1回全生徒に行うべきです。精神的な悩みは親に言いつらく、病院に行くのもハードルが高いものです。学校に精神科医や精神保健福祉士など専門家が来ることで、こどもの居場所づくりや意見・気持ちを表明する場になると考えます。こうした支援の導入を強く望みます。

○喜多氏

非常に目立つような言動をすると、たたかれてしまう学校の雰囲気があります。今のこどもや若者が対面で意見を言いにくい。意見を言うことによっていじめを受けたり、生意気だと見られたりしてしまう、意識が高い系だと見られてしまう、そのようなリスクを負わないと、なかなか意見が言えない環境を何とかしなければいけないというのは、最初のお話のところで重要なテーマだったように思います。

それから、意見だけではなくて、気持ちも大事です。フィーリングという言葉で国連も言っていますが、こどもの意見表明については、気持ちを大切にしようという部分も、こどもの意見表明参加の在り方として、声の出し方として非常に重要なポイントだと思います。

○Cさん

安心して物を言える理由について、自身の経験をもとに述べます。中学校時代は全寮制のキリスト教学校に在学し、規則が厳しくプライバシーもほとんどありませんでした。部屋検査ではロッカーを開けられ、乱れがあれば減点され、一定点数で労働が科せられる環境でした。最初の授業は創造論であり、進化論を否定する内容でしたが、私は『種の起源』を読んでいたため、授業での誤った記述を指摘しました。不安を感じていましたが、牧師の先生から「いい意見です」と評価され、受け入れられたことが衝撃的であり、安心して意見を言える環境につながりました。高校は通信制に進学し、いじめや家庭環境の問題を抱える生徒が多く、虐待やオーバードーズ、死にたいという話も聞きました。物質的に豊かな社会でも孤立は死につながると感じ、人は社会性の生き物であり、孤立への対処が重要であると考えます。安心して物を言える感覚が、こうした課題への基礎と

なっています。

○Dさん

私が通っていた小学校は、少人数で先生が一人ひとりに寄り添い、のびのびと自分らしく過ごせる環境でした。しかし中学校に進学すると、人数が増え、勉強と部活動の両立が求められ、先生の接し方も厳しくなりました。間違えることや怒られることが怖く、常に緊張しながら生活し、自分の意見を言う余裕もなくなりました。上下関係が強く、理由の分からないルールにも従わなければならない、ストレスを感じていました。高校生になり人間関係で悩み、通信制高校に転校しましたが、そこで出会った先生は私の話をじっくり聞き、気持ちを大切にしてくれました。小学校時代のように自分を受け入れてもらえる感覚は、心が弱っていた私にとって救いでした。

この経験から、こどもが安心して自分らしくいられる環境が重要だと気づきました。厳しいルールも必要ですが、こどもが自由に意見を言え、間違えてもやり直せる環境があれば、個性を大切にされた教育が広がり、誰にとっても心地よい場所になると考えます。

○Eさん

これまでの経験から、私は家族に対して恐怖心を抱いています。現在も一緒に暮らしていますが、毎日不安な気持ちが続いています。学校に行きたくないと伝えると冷たく対応されたり、心に傷が残る言葉や態度を受けることがあり、そのたびに自分の心が弱いのではないかと悩むことも多くあります。両親は「みんなと同じでなければならない」という考えが強く、私は周囲と違うことで否定されることが多くありました。小学校時代から学校にも家庭にも居場所がなく、今も心が落ち着かない日々です。私が望むのは、どんな意見でも受け入れてもらえる居場所です。たとえば、つらい気持ちを打ち明けたときに否定されるのではなく、「そう感じているんだね」と受け止め、一緒にこれからどう生きていくかを考えてくれるような場所があればよかったですと感じています。

○Fさん

安心して意見が言える環境づくりについて、私は「余白」と「競争」の重要性を考えています。高校まで言語障害や吃音症があり、コミュニケーションに苦手意識がありましたが、地域の祭りのボランティアで失敗しても受け入れてくれる仲間に出会い、未熟なまま挑戦できる余白があったことで社会参加のスタートラインに立つことができました。挑戦には成長のためのリスクと致命的なハザードがあり、本来排除すべきはハザードのみで、リスクは許されるべきですが、現実には大人の善意で若者の挑戦が早期に排除されがちです。若者の意見表明の場が少なく、あっても重要視されず、上層部で却下されることが多くあります。若者＝未熟という固定観念が柔軟性や創造性を奪い、失敗しても見捨てず応援してくれる大人が必要です。資金や相談相手の不足も挑戦の障壁となっています。

安心して意見が言える環境には、否定されない余白と主体性を尊重する仲間が不可欠であり、感情の段階から丁寧に受け止め、傾聴と応援を積み重ねることで挑戦が育ちます。声にならない声を共有し、小さな挑戦を形にすることが、若者の主体性を守る方法である

と考えます。

○喜多氏

どうもありがとうございました。

一つの共通項として皆さんから挙がっていたのは、否定されないという安心感です。批判されると思って話したら、「いい意見だ」と牧師さんに言われたという話や、通常の高校ではしんどかったため、通信制の高校に行ったら、すごく話を聞いてくれてほっとしたという声がありました。つまり、大切なのは受け手です。こどもたちが意見表明や参加をしたいと思っても、大人側の受け止め方次第で、こどもたちが伸びていくか、伸びていかないかの大きく分かれると思います。

安心して、どんな意見でもこどもたちの気持ちを受け止められる大人側の新たな力量が求められています。世界子供白書では、そのようなこどもたちの意見を聞く大人側の力が求められている時代なのです。これは一般的にもそうですし、専門学会では、アドボケイトのようなやり方で専門職種までつくろうと議論される時代になっています。私の場合は、チャイルドラインのようなこども専用電話を通じて、こどもたちの気持ちを受け止めていく、いわゆる伴走者という言い方でこどもの意見をきちっと寄り添いながら受け止めていけるような大人がいるのだと発信すべきだという考え方のもと私たちは活動してきました。日常的に、家庭や学校でこどもたちの意見が受け止められない、受け入れてくれない状況があり、何とか社会で受け入れるような場をつくっていく役割を、今までは民間が担ってきました。こども基本法ができて以降は、公的な仕組みとしてもこどもたちの気持ちを受け止めていく仕組み、こども参加や意見表明の仕組みを様々な場をつくっていく必要があるのではないのでしょうか。

今日は一般論として、まちづくりやコミュニティーの視点から話を深めてきましたが、それだけではなく、学校現場や福祉の現場、医療の現場、様々なところでこどもの意見をどのように受け止めていけるのか、その仕組みづくりが公的な立場でも求められる時代に来ました。今までは民間が支えていた部分を、公的な仕組みとして担っていくことが今後求められていくのではないかということを、私たちは受け止めておくべきだと思います。千葉県としても、こども基本法の成立以降、普及啓発や人の意識を変えていくための取組に加え、公的な仕組みや制度も新たに充実させていくことが、これからの県として求められていくのではないかと思います。

皆さんから一言ずつ言って終わりにしたいと思います。

○Aさん

若者だけでなく、大人が変わっていくことが必要だと、一若者としては思っております。

○Bさん

様々な方の意見を聞き、私の中でも意見や考え、意識がより良く変わりました。私だけでなく、たくさんの方の意識が変わっていけばいいと思います。

○Cさん

死にたいと言えること自体が希望です。なので、その声を聞いてあげられるように、みんなで取り組んでいきたいと思います。

○Dさん

今日のお話を聞いて、居場所は一つだけではなくて、「こちらが駄目ならここに行こう」といったように幾つかあることが大切だと思いました。私もこれから社会人になっていく上で、信頼される大人になれるように努力したいと思いました。

○Eさん

私は、過去の自分に「こんなに優しくてすごい大人がたくさんいるから安心していいのだ」と伝えてあげたいと、今日の講演を通して思いました。

○Fさん

これだけ若者の声を応援してくれる大人たちがいることはありがたいことだと常々思っています。私もボランティア活動を通していろいろな人たちと出会って、ここまで成長できました。1人でも多くの若者に、このような場を少しでも知ってもらいたいと思います。

○喜多氏

大変短い時間でしたけれども、今日は第1回目ですので、千葉県ではぜひこれから2回目、3回目と、今日の集まりを一つのベースとして発展させていただきたいと思います。始まったばかりですので、こども基本法の下での意見表明参加、こどもたちの権利として保障していく取組を今後ともこのような場を使って広げていけるようにしたいと思いますので、よろしく願いいたします。今日は本当にありがとうございました。